

---

# 明日は明日の風が吹く（仮）

風月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明日は明日の風が吹く（仮）

### 【Nコード】

N5092Y

### 【作者名】

風月

### 【あらすじ】

リベルタ民主第三貿易国。その阿呆王子ことアルヴァント・リベルタ・サイクスは今日も自由への逃走を図る。変態メイドにツンデレ妹、関西娘にDS王妃にDM王。今日もリベルタは平和です。基本的にギャグ。でもシリアスも多め。

## 1話「思考の中で」

神様って言う奴はなんて愚かで、くだらなくて、糞野郎なんだろ  
うか。人を運命という玩具で弄び、そして簡単に命を奪う。

ああ、気に入らない。まじで滅びればいいのに。

いつもふと思うことはそんな事ばかりである。

ああ、気に入らない。ああ気に入らない。

そんな言葉ばかり口に出している人間口癖になるようで、気がつけば俺は愚痴を自然と漏らしていた。

こんな気に入らないのは神様って奴のせいだ。俺を縛り上げて、そうしてケタケタと笑って見下ろしているのだろう。なんて残酷かなんて野郎だ。

「ああ、気に入らない。君もそう思わないかい？ミレイユ」

「……いきなり申されましても私にはわかりかねますが」

隣に立つメイドはまったく無表情のままにそう答えた。俺は肩を竦めてみせてそうして持つペンをクルリと回す。

「神様だよ。人が不幸になるのも、幸せになるのも全部神様が決めてるんだろう？僕が今不幸なのも神様って奴のせいさ。だから気に入らない」

「左様でございますか」

「僕を不幸にしまったく何が楽しいのさ。神様ってやつは本当に嫌な御人だね」

俺は相変わらずペンを手元で周り続けさせる。何も言わないメイ

ドを背に感じてそうしてもう一度口を開く。

「と、言うことでちょっと幸せになるために外に」

スパアン！

席を立とうとして体が沈んだ。綺麗な音が後頭部を襲い、机に顔をぶつける。ものすごく痛い。

「何をくだらないこと申しておるのですか。さっさと席について勉強に精を尽くしてくださいまし」

「何が悲しくて人間勉強に勤しまなきゃならない！僕はピッチピチの17歳だぞ！こんな若さ溢れる体を弄ばすとはどんな不幸だ！どうせ精を尽くすならあっちの方を」

スパアン！

再び強い衝撃が今度は脳天に直撃する。軽いめまいを覚えて俺は机に沈んで頭に手をやる。脳天が熱く、後にたんこぶになるのではないかと思いつながらさすった。

「左様でございますか」

相も変わらずブレずに彼女は言葉にし、彼女の左手が俺の勉強をしると命じている。俺も大概痛いのは嫌なのでしぶしぶペンを走らせる。

畜生。俺が勉強に張り付けにされているのも全部神様のせいだ。そうに決まってる。

……怖くてこの女のせいとは断じて云えまい。

リベルタ民主第三貿易国。隣国に挟まれる形で存在する国。規模としてはデカイとも言えないし、小さいとも言えない。世界14国のうちの1国であるこの国が俺の故郷であり家である。

ついでに言えばその王国の城に住んでいて、更に言えばその王位継承者　つまり国王の長男であり夢の王子であったりする。

比較的戦争も起きず、海沿いに面し豊富な土地が数多くあるために隣国との貿易も盛んに行われそれなりに裕福でもある。

ので、毎年冬をどうやって過ごすか目を真つ赤にそめなくても良いし、戦争に頭を悩ませなくても良い。

つまり言えばボンボンなのである。

そんな国に生まれていて、そんな中で王子という身分でさて金を使って遊び放題か問われれば答えは「NO」である。

やれしきたりがどうだの、勉強がどうなどと、一日中部屋と机に縛り付けられる。やっと開放されればやれ騎士道がうんたらかんたらと、剣を持たされボコボコにされる。

果たしてこんな生活は楽しいか？

答えはやっぱり「NO」である。

俺は自由が欲しい！

城下町の子供のように外を自由に遊び周ったり、夜の大人たちみたいに銅貨を回すような賭け事がしたい。

では、どうすればいいんだろう？

この鳥かごのような場所で自由になるのは。

簡単だ。

その籠の扉を破って翔べばいい。

そう、自由への逃走だ！

「ふはははは！では諸君！サラダバー！」

「お、王子がまた逃げたぞー！」

「追え！必ずお捕まえしろ！」

「隊長！トラップが！」

「うお！落とし穴だ！なんで城内にこんなものがっ」

「ふははは！騎士団の諸君！ご苦労！そこで男のぬくもりを感じて墮ちろ！」

毎度の如く国の騎士を捕獲用に使ってくるとはご苦労な事である。だが、このアルヴァント・リベルタ・サイクスの逃走を早々阻む者は。

ヒュン！

え？

今ちょっと何かかすめましたよ？空気を裂いて何かを通り過ぎましたよ？

俺の見間違いでなければもしかするとあれは弓ではないだろうか？

……………。



「ちょっと！弓はないでしょうが！僕は王子だぞ！王子に弓を向けるとは、不敬罪と逆賊罪に……うわぁ！」

「お気になさらずに！ちゃんと矢尻を潰しております！」

「そういう問題じゃ……ひいひい！」

「王妃様の許可も取ってありますゆえ！大人しく捕まれえ！」

「あの糞ババアああああああ！」

……拝啓、天国の爺様。今日も自由への逃走は難しそうです。

## 2話「士官する日」

リベルタ民主第三貿易国。14国ある中の1国であるこの国は隣国との貿易が盛んである。豊富な土地、山、そして珍しく海に面しているこの国は戦争が起ころうが中立の立場で貿易を行う国。

戦争に一番近く、または遠い国とも呼ばれている。

そんな国に士官したのは先週の事であった。

「ここが、リベルタ……」

感嘆な声を漏らすのは黒毛の少女。まだ幼い顔を残すがその身には鎧が着せられている。皮で出来た鎧ではあるが、総重量を合わせると8キロ弱の重さであり、その背には少女の背を軽々と越す槍があった。

まったくもって少女に似つかわぬ格好であるが彼女は騎士を指すためにここに来ている。士官学校を卒業し、学長に招待状を書いてもらったこの国で士官するためである。

士官学校とは永劫第8中立自治都市ノバルが作ったシステムであり、そこで優秀な兵士を育てて他に仕官させる事で国益を得ている。

自治都市という事なので、国ではなく戦争にはまったく関与しないと宣言している。

戦争規定にも必ず項目一番上にノバルを侵略せず、これを関与せずと書かれてくらいでもあるのだ。

昔、まだ国が14国に別れて居なかつた頃にノバルの人材力を欲しがった国が戦争を仕掛けに行つたが、即刻他の国々に困つてマウントポジからフルボッコにされた、という伝説も残っている位だ。

誠か嘘かは判らないが、その国と同盟を組んでいた国も破棄して包囲したという。

そんな士官学校を卒業していざ士官した国は黒毛の少女　サクヤ・ミチカゼは「ほー」とか「うおー」とかそんな言葉を残しながら歩いていた。

一見すれば凄いことなのである。

市場には声が絶えず、人には活気があり、そして笑顔がある。

これが建国から300年経つた今でも続いているのだからそれはまた凄い事なのである。

建国当時は戦争ばかりで大変荒れていたらしいが今はそんな様子など塵程ない。

ノバルも人はあつたがあそこは神聖な場所であつてこうして怒鳴るような声はなく静かとした所であつた。

ノバルの空気が重いと感じていた彼女に取つてこうしたお祭りのような騒ぎは大好きである。

学長に感謝せねば。

そう思い、心踊らせた少女がようやく城に着き、招待状を見せて士官したその一週間後。

「追えー！あの阿呆王子また逃げたぞー！」

「捕まえるっ！殺せっ！」

「今殺せって言ったやつ覚えてるよ！不敬罪で極刑にしてやる！」

「やれるもんならやってみるバーカバーカ！」

「なんだとっ！よしかかってこい！この僕の宝剣で切り刻んでっ……  
…あ、とらないで！ちよ、5人相手とか卑怯だろ！ちよ、やめ！蹴るな！いいか、僕は王位継承者だぞ！僕が王様になったあかつきにはまずお前らの首を吊るしてや すいませんでした。謝りますからミレイユのお仕置き部屋だけは勘弁してください！」

自分はもしかして、えらい所に士官してしまったのではないだろうか？

まったく、この国の騎士共はどうなっているんだ。

俺は部屋の中で虚しくペンを回していた。いつも鬱陶しいあのメイドは士官したばかりの兵士たちを相手しているためにいないらしい。代わりにムサイ男が俺の部屋の扉を見張っているという事実。

隙について逃げだしたのは良いものを、こつとも簡単に捕まってしまうとは、最近騎士達の態度が俺に対して雑になってきている気がする。

王子に武器向けるわ囲って虐めるわ、他の国であるなら間違いなく極刑だぞ。

最初は遠慮がちに捕まえてきた頃が懐かしい。まるで子供をあやすように優しく「待て〜」と追いかけていた頃が。

容赦無く追いかけてきたのはいつからだろうか。

母上の大切にしていた花瓶を逃走中に割った時からじゃないかな？

その時の母上は顔を黒く染め上げてオーラーを出してただ一言「やれ」と命じていたらしい。

……いつも思うがうちの国の女性陣は比較的恐ろしい奴しか居ないような。

「むむ……絶対いつか仕返ししてやる！」

一人虚しく声をあげて拳を突き出す。しばらくしてその腕を下ろして本棚に足を向けた。

歴史書から様々な参考書。礼儀作法やらなんやらの中で小さく古びた本が1つ。

それを取って机に広げる。

とある勇者様の物語。

世界誰もが知っているその本は流行している絵本ではなくその原本、と『言われている』本である。

絵本では幸せに、だが実際は悲しい勇者様の物語。

それを優しくなぞって呟く。

「俺は何しに生まれてきたんだろうな」

リベルタ民主第三貿易国王位継承者アルヴァント・リベルタ・サイクス。それが俺の名前である。生まれる前から付けられた名前であり、17年間経った今でも変わらない。

だが、それが本当の名前じゃない。

「勇者様 か」

俺の、本当の名前はケンジ。ケンジ・サクラギ。

世界を壊してめちやくちやくにした極悪人で、勇者である。

### 3話「勇者の王子」(前書き)

どんな障害にも負けないという意志を表明する言葉。



### 3話「勇者の王子」

記憶は曖昧で不確かで、でも確かな感覚がある。

キツカケはきつとあの物語を見た時からだった。

まだ国が14個に分けられていなかった時、その世界は2つあって繋がって多くの国が存在していた。

だが何処からか悪い悪魔が降ってきて世界をめっちゃめっちゃにして、それを勇者様とその仲間が救うお話。

世界を1つに纏めてそしてみんなで幸せにハッピーエンド。

そんなくだらない話を見た時からだ。

自分が前世の記憶を持って生まれてきたこと、そしてその記憶は世界を纏めて讃えられた勇者であること。それが一気に俺の脳の記憶を襲った。

欠落した記憶もあるけれども、確かに俺は勇者と呼ばれる存在であつた。

人を殺した記憶も、人を失った記憶もある。

気が狂いそうだった。何かめっちゃめっちゃにしてやるうかと思つた。自分ではない、誰かの記憶が入り込んでそしてめっちゃめっちゃにする。記憶が酷く曖昧でそれが自分ではなくて、いきなりフラッ

シュバックが襲ってきたり。

大分荒れたよ。思春期には堪えるね。

まあ、その時は大分ある人に救われて落ち着いたからよかった。

もしあの時の救いがなければ俺はきつと壊れていたと思う。

荒れていた性格も大人しくなって、無事に今まで日常を過ごさせてきたし。

だけど、どうしてか腑に落ちない。

ああ気に入らない。なんだって神様は俺にもう一度人生をくれてやったのか。何かの罰か？もっと反省しろってか？

全く冗談じゃないぜ。

なんだか、考えたらむかつてきた。こっ、何か壊したくなるよ  
うな。。

そこへ、控えめな、小さな音が丁寧に二回。

「王子、夕食のお時間でございます」

蒼のショートカットヘヤーにメイド服。そして白く無表情。

ミレイユ・サルバトーレ。完璧なサディスト。リベルタのメイド  
長である。

阿呆王子と言えば、有名である。アルヴィ王子と言つ呼び名よりもこの城内で、いや下手をすれば世界で『阿呆王子』と呼ばば何処でも通じるだろう。

だが、そんな彼も荒れている時があつた。世界には公開されておらず、事件に関わつた者たちのみで解決したために、知られていないが14歳、15歳の時にはノバルの王族学校で流血事件を起こした程だ。

勿論、そんな事をしでかせば国同士の戦争にもなりかねない。だが、場所はノバルでの出来事である。

それはもはや脅威と言って良いほどの中立的権力を持つノバル内ではすべてがノバルの法律で裁かれる。

勿論アルヴィは一ヶ月の停学。その程度でよく済んだものとミレイユは思う。

なにせ、本当に殺しかねなかったからだ。

酷い酷いと思っていたが、あそこまで酷いとはミレイユ自身思っていたいなかったし、そしてなにより　怖かった。

メイドたるものの感情の抑揚が出来てこそ立派なメイドである。ミレイユは元から感情が疎いためにそういった意味では優秀であった。

だが、ミレイユが初めて、本気で怖いと思ったのだ。

放っておけばすべてを殺しそうな、破壊しそうな彼の表情に。

今ではご覧の通りに馬鹿やっているが、それでも時折あの顔を見せる時がある。主に一人で居る時が多々あるため、ミレイユとしては常に彼の側に居ることを心掛けているのだ。

(また……あの顔をなされた……)

人はミレイユの事を(おそらくアルヴィだけであるが)サディストと呼ぶが、それでも彼女は人間である。自分がお使いする人を心配するし、支えようとすする。

ただ、一つ。ミレイユが不思議に思うことがある。確かに最初はあの顔は怖く、恐ろしかった。だが時折、恐怖と共に同時に下腹部

がゾクゾクくる事があるのだ。

(ああ……なんと美しいお顔なのでしょう……)

要するに、ミレイユ・サルバトーレは完璧なメイド長であり、サ  
デリストでありマゾヒストなのである。

(王子を虐めるのも楽しいですが、きっとあの顔の王子に苛められ  
るのもまた……)

無表情完璧メイド長は完璧な変態であった。しかも本人が気がつ  
いていないのもまた更にたちが悪い。

ふう、危ない危ない。

一息をついて俺は食堂へと向かう。

たまに油断するとなんか手当たり次第壊したくなるから嫌だよ。昔から物に当たる癖があるのが自分の汚点だ。

さらに言えばこの体で前の体と同じ感覚でやると壊れる可能性が高い。前の体は加護も受けて尚且つ修行してきた体だ。

腕を振るえば牛が吹っ飛び、強力な魔物の突進も防げる頑丈な体だったからな。

この体は至って普通でさらに言えば走る事に関して以外は全く長所がない。

剣も録に握れないとか、マジで鍛え直すしか方法はないかもしれない。

一応筋肉トレーニングを行なっているんだけどね。この体の成長速度が遅いためか中々結果がでない。

自分はアルヴァント・リベルタ・サイクスであり、ケンジ・サクラギである。だがケンジ・サクラギはもう死に勇者の体ではない。

だから俺は深く考えずに馬鹿ばっかやっているのだ。

いくら記憶を持っていてもアルヴァント・リベルタ・サイクスであることは変わりはない。何処までも自由を求め、阿呆な王子なのだ。

「それにしても、さすが王族の食事」

食堂の席を着き一人ボソリと呟く。なんども見慣れた光景ではあるが考えてみればこんな豪華な食事は早々ない。

食材一つ一つが輝くなんて王都でも中々拝めない。

「おう、アルヴィ。また逃走しようとしたんだって？」

そう気さくに話かける髭男はガリル・リベルタ・サイクス。俺の父上でありこいつも相当な変わり者でもある。

「父上……母上に申し付けてください。弓は止めると」

「あら、お気に召さなかったかしら？」

食堂の扉から威風堂々と現れるのは『鬼女』『ドSの王妃』『ミレイユの師匠』と色々な呼び名が飛び交う俺の母上。ココノエ・リベルタ・サイクス。到底40代とは思えない美貌と元気が特徴らしい。

「何処の世界に息子に弓を放つ親が居ますか」

「何処の世界に息子が落とし穴作ったりして逃走を行おうとしますか」

普段は優しいのだが、一旦スイッチ入っちゃうと止められないんだよね。

聞けば父上も相当泣かされてきたとか。

「まったくエライ目に合いましたよ、本当」

「なら、兄様が逃げなきゃいいだけじゃない」

続いてやってきたのが我が妹マリー・リベルタ・サイクス。通称『ツンデレ』意味がわからないが、なんでも兵士達の間で流行しているらしく意味合いとしてはツンツンしててデレるらしい。意味がわからん。

さて、この豪華な食事を頂くとして、さすがに会話の1つもないとはなんだか寂しい物がある。本来ならば食事中に口を出すことは礼儀として悪いとされているのだが、そんな気まずい中で飯を食っても美味くない。

「所でなんでも新しく士官してきた兵士が居るとか」

夕食の会話なんてどれも突発的でどうでも良い話である。別に兵士の話には興味はないが良い話題なんて浮かばないために俺はその話を切り出す。

「ん？ああ、ノバルから派遣された兵士だ。騎士の素質もあるし、やる気も十分にありそうにみえた。中々良い人材だよ」

「ふむふむ。やはりノバルからですか」

「ええ、それに黒髪の可愛い娘よ」

「母さまー！」



妹の言葉にハツとした母上で合ったがもう遅かった。

ガタツ。

食事中だと俺はいきよいよく立ち上がる。黒髪の可愛い娘？

「これは是非僕のハーレム帳に入れざるおえない」

「相変わらず兄様は変態ね」

何度でも言え！こちらら前世でも童貞なんじゃ！

せめてヤル前に死にたかった……。

「お前、あの宿屋の看板娘はどうしたんだよ？」

「中々会えないので諦めました」

てか、あんたら外に出させてくれないんでしょうがっ。

「まあ、嫁選びなんて貴方の自由だけど、そのハーレム？ってやつは止めたほうがいいんじゃないの？」

「何故でしょう」

「いつか刺されるわよ、貴方」

……。

「女の子に刺されるなら、それも本望かと」

なんとも言えない家族の視線が俺の肌突き刺さる。

え？別に俺変な事言っ  
てないよね？

#### 4話「模擬戦にて」

士官してきた兵士は全部で3人。後、ノバルから推薦書付きでやってきたの1人しかない。

サクヤ・ミチカゼ。それが彼女の名前らしい。

「邪魔するよ」

「おや、阿呆王子。今日は偵察ですか？」

「君、僕一応王族だからね。その首飛ぶよ？」

2枚目な笑顔を向けてくるのは騎士団の中の中隊を束ねる隊長。サベルト・クライド。身長が190センチ以上もある大男。30キロ以上ある鎧と20キロ弱あるハルバートを軽々扱う筋肉野郎。

「今日はノバルからきたという新人を見にきたんだ」

割りとは本気で言ったのにまたまたーとか笑い続けるので仕方なしに俺はここに来た理由を告げた。

城内の訓練所。最下層にあるこの場所では常に実践を意識した訓練が行われている。中立国でボンボンな国の癖に世界防衛戦力率（ノバル統計）は2位とかどんな国だよねー。

この防衛率は何も対人のみならず魔物の場合も適応されるからね。基本魔物を相手にするこの国が2位な事もうなずけるかもしれない。

一度ワイバーン4体という災害レベルの魔物を撃破した時は帝国通りこしてランク上がったもんね。

ちなみに帝国というのは14国の中でおそらく1番目に戦力が大きい国。正式名は第一帝国ノスカテリア。一度皇帝と会った事があるがあれはただの工口親父だ。

まああんな工口親父でも剣の腕は確かだけでも。

「ああ、先週士官してきた新人ですか」

「うん。その娘がとても良いと聞いてね、どれ僕の嫁候補にでも、と」

「……王子、まだその夢諦めてなかったんですか」

なにかね、そのやれやれって言う顔は。

「で？その娘はどこだい？」

「今丁度模擬戦でもやってるんじゃないですかね」

「へえ、ちよつと覗かせてもらつよ」

模擬戦となるとそれなりに広い場所である。こここの訓練所は3下層に別れていて一番下の地下が模擬戦場となる。

形としては円形型。闘技場のような雰囲気である。模擬戦場がある部屋自体が広く多数戦も想定された戦いが行われる事もできる。

でもまあ普通の模擬戦場である。凄い所は森や山などの地形での戦闘を想定した模擬戦場が用意されている所なんてものもある。

その中でサクヤ・ミチカゼを探すのは日が昇った太陽を見つける事くらい容易かった。

模擬戦場の真ん中。長い槍を構えて目の前の相手を牽制する黒髪の娘。皮の鎧を着こなしそれでいて兜は付けず相手の剣を肉薄しながら薙ぎ払う。

「……」

俺は困いその模擬戦を見ている兵士たちの間を通り抜けて一番前へと出た。いきなり隣を通る俺に舌打ちをする者も居たが俺の顔を見て慌てて引く。

サクヤ・ミチカゼを相手にしているのはタカが。

タカ。孤児であるから苗字がない、恐らく兵士の中で一番仲が良いと思う。よく一緒に遊ぶし酒も飲む。

実力はあるのだが、何処か抜けている奴で騎士になる一歩手前なくずぶっているらしい。

サクヤ・ミチカゼが持つのは普通の槍。タカが持つのはロングソード。どちらも訓練用で刃は潰してある。

「ていやああああ！」

声に出して踏み込み槍の間合いから突きを繰り出す。タカはそれを避けて少し体重を前に預けて一歩踏み込む。

槍は突くものであって払うものではなく、そのために間合いが難しくある意味扱いにくいとタカは口にするがそうではない。

突かられるとどれほど防ぐ事が難しいか。

それを例え受け流しても剣の間合いまで詰められることは恐らく難しい。

伸ばした腕を引けばすぐに突くことが出来る。

それに別に槍でもなぎ払ってよいのだ。ただ刃が通らないだけであって少なくとも打撃として入れることはできる。

ハルバードは突くことも切ることでもできるが、とても難しい武器だ。重量がまず半端ではないし刃が2つ付いているためにとても壊れやすい。ハルバードをまるで手足のように扱うのなら、それはもう達人の域だ。

槍は突く事に特化しているが軽く扱いやすい。

まあ、俺もそんなに詳しくはないのだが。だって剣専門だし。

「ふっ！」

タカが踏み込んだ状態からさらに一步前へ蹴って近づく。

それと同時にタイミングにサクヤ・ミチカゼも一步下がりをしして槍を引かせてくるりと反転。

そのまま薙ぎ払う。

「いつ!?!」

太い棒がタカを襲い吹き飛ばす。

「いてて……」

「これで終いやな」

尻餅を着くタカにサクヤ・ミチカゼは槍を突きつけた。

どよめく歓声。それと煽るような声が周りから湧き上がった。

「タカ……君は馬鹿か、馬鹿なのか」

歓声とも罵声とも、煽りとも言える声の中から俺は歩みよってタカを見下ろしそして踏む。

「げへっ」

「君は間合いというものを理解しているか？ 剣を袷に握らない僕でさえわかる単純な事さ。槍の距離で剣は届かない」

オラオラ、野郎に踏まれる気分はどうだ？ ええ？

「ええい！いい加減やめろよ！」

俺の足を振り払い、そして立ち上がる。

茶髪の短髪。まるで鶏のように髪を上立たせており肌の色は少し褐色。比較的軽い服装で胸元からその割れた腹筋までを見せている。

髪を上げあげて俺を一瞥。

「きよ、今日はちよつと調子が悪かったただけだ……」

「成敗！」

俺は渾身の一撃を込めてタカを殴る。思わぬ衝撃に非力な俺の力でもタカの体は浮いて地に倒れた。

「おのれ！自らの敗北を認めず、言い訳か情けない男め！男ならシヤキンと前を見る！時に負けを認め時に挫折しろ！それを乗り越えてこそ男だろう！」



「いつも逃げてるお前に言われたくねえよっ！」

……確かに。

「ま、まあ良い」

「おい、こら阿呆。俺は何のために殴られたんだ？ああん？」

あー無視無視。

「さて、君がサクヤ・ミチカゼかな？」

俺は嫁候補の1つとして新たにハーレム帳に刻み込んだ、サクヤ・ミチカゼを見る。すこしオカッパなような髪に黒色の瞳。皮の鎧を着ているため胸の豊富さはわからないが、恐らく並であるがスタイルは良い。

あの長い槍を振り回すような筋力があるとは思えないような細身であるが、まあ気とか魔力とか使えば人間幾らでも補正できる。

しかもノバルの士官学校を卒業したのだからそれなりに優秀だろう。

ふむふむ。顔立ちも実に綺麗に整っているし、何より極東の純粹種か。

俺も前は純粹種（同じ部族の血が流れる事）であるために、しかも火の国の住人であるから少し嬉しい気もする。

これはますますポイントが高いぞ！

そしてまず女性と接触する時はまず第一印象が大事

「ああん？あんた誰や」

……。

ふっ……まあ良いこれくらいの無礼、受け流してこそ王の器と言  
うもの……。

「僕はこの国の王子である！」

「っ……！し、失礼しました！自分はサクヤ・ミチカゼと申します  
！先週からこの国に士官させていただいております！」

ほ、ほら！いい子じゃないか！うんうん、やっぱり女の子は良い娘  
じゃないと。

「よいよい、僕は王子だ……そして将来的には貴方の王子でもある  
かもしれないよ」

一瞬の沈黙。

唾然とするサクヤ・ミチカゼ。あれ？なんか可笑しかった？

「……自分、言うてて恥ずかしくないんか？正直きもいで」

……。

「あっ！いえ、すいません。つい、ホンネが」

あ、うん。自分で言うて気持ち悪いって思ったよ？でもわかるよね？これって冗談なのよ。真に受けてもらってもこっちが困るよ……。

「そ、それにしてもこの国は素晴らしいですね！民がすべて笑顔で活気があって……お、王子の噂も多々伺っております」

慌ててサクヤ・ミチカゼが言葉を繋いで何かを褒め称える。

「ほう、僕の噂とな？どんなだい？さぞかし立派な噂があるのだからね？」

「えーと、聞いた話では」

そこで一旦言葉を区切り何か思いだすようにして自然と彼女の口が開いた。

「小心者、ドM、顔が良いが性格が残念。頭に一年中お花畑が咲いてそう。逃走者、阿呆王子、馬鹿王子、変態王子、口ばっか、逃げることだけは一人前。セクハラ王子など多々等ですね……って、あ」

「  
……」

「えっと……そのすいま」

「うわああああああああん！みんなそんな風に思ってたなんて  
ええええ！！」

ぐれてやる！畜生！



## 5話「兄を想う妹」

マリー・リベルタ・サイクスは『阿呆王子』事アルヴィの実の妹である。同じ血が流れ、そして同じ親を持ち、同じ家に住む。

だがマリー自身、兄を兄と思いたくない日がある。

例えば兄が真剣な目をしている所を見れば手元には城下町の女のチエックリストだったり、例えば、本来街を守るはずの優秀な騎士団から吊るされてボコボコにされたり、例えば、色目を使って侍女達にやはり吊るされてボコボコにされたり。

見ない、見えない、関わりたくない。

剣の腕もいまいち。魔術力も中途半端。魔力も筋力も一般のそれと対して変わらず。

頭と逃げ足だけは良いがなんの自慢にもならない。頭が良いと言っても思考がもはや残念なためにプラマイゼロ。むしろマイナス。

あれ？もしかすると私の兄ってカスなのじゃないかしら？

と、思つのはほぼ毎日。

けれど、けれどもたまたまに極稀にハツとするような顔を見せる。真

剣な眼差しで何かを見据えて、はたまた何か怒りに震え。

そう、目の前にいる兄と同じ顔をしている。

バルコニーに立ち小さな柵の上に肘を置いて頬を付いている。その横顔は何かとても真剣であった。

兄がたまにわからない時がある。

馬鹿やって、阿呆やって、それでいつもヘラヘラして情けなくて、いつも逃げてばかりの兄。

マリーは詳しくは知らないが兄は14・15の時は荒れていたらしい。

部屋に引き籠もり、たまに王族学校に行っていたが中退してきたのだ。その時の様子はマリーは知らなかった。祖父母 母の父と母に当たる人の元でちょっとした修行をしていて家を離れていたためである。

リベルタ家の長女としての修行を10歳の時から行っていたためであった。

母は笑い言う。今は馬鹿をやっているがそれでも昔のあの子よりは良い。

父は苦笑し言う。ただ、時折当時の顔を見せる。何処か遠くを見据え、何かもわかったような顔で、そして怖い顔をする。

兄の話の聞くと2人はそう答える。

馬鹿をやっている兄しか見ていなかったマリィにとってその顔はとてとても意外で　そして不覚にもかっこいいと思ってしまったのだ。

「　兄様」

息を不覚吸ってマリィは兄に声を掛ける。兄は振り返らなかった。

「マリィ、か」

歩みを進めてマリィは兄の一步後ろに立つ。

「何か考えごと？」

「うん、そうだよ」

兄が見る視線は変わらなかった。城下町を見つめ、風を受けている。

「……………」

「……………」

良ければ相談に乗ってあげようか？

そんな簡単な一言がマリィには言えなかった。

こんなにも真剣な兄を見るのはずいぶんと久しいので、ちょっとそのまま見続けていたかったのかもしれない。



「……マリー」

意外にも兄の方から口を開いた。やはり、誰かに話しておきたかったのか、兄はそつと口を開いて語りだす。

「皆、僕の事をさ『変態』とか『馬鹿』とか『阿呆』とか『小心者』とか言っているという噂を小耳に挟んでね」

……あ、あれ？

「それでね、もしかして僕って皆から結構馬鹿にされてるのかなー  
って」

……。

「……」

「……」

え？何を今更？

え？えつと、その、もしかしなくとも、我が兄は今更言われ続けている事を本気で考えてた？

マリーは啞然とし、そしてマジマジと兄を見る。

どうやら本気で考えていたようで、

ハア〜。

ため息を吐いていよいよマリーは軽蔑するよつな目付きを兄に向けた。

やっぱり兄は兄だった。そこに一変の狂いもなく、世界が正常に動いていた。

「兄様」

「うん」

「兄様が馬鹿なのは皆知っています」

「やっぱり！？でもおっかしいな。僕が馬鹿なわけがないのに。何故そうなったのだろうか」

「自分の胸に聞け、このヘンタイ」

「何故に怒る！？」

何故我が妹は怒っているのだろうか？深い足音を立てながらバル  
コニーから去った妹見送って俺は首を捻った。

まあいいや。

再び城下町を見下ろす。

1人は楽だ。

誰からも関与される事なく好きな時間を過ごせる。いっぱい考  
えることもできる。

俺ってちょー孤独。孤独のひーろーってやつだね。

「……」

頭に手を当てる。

断片的な記憶。漠然とした情報。俺が誰で、何者で、何をしたか。

かつて共に戦った仲間、そして敵。

脳裏に浮かぶ人ではない顔。そして悲鳴。血を赤く染めて大地に立ち、崩れる何か。

「……、もしかくしゃする。」

確かに記憶があるのに、まるで解きかけのパズルを倉庫から見つけたような感覚。久しぶりにやろうと手にかけてたらパズルのピースは全部そろってなくて、苛々と腹を立てる。

剣技も分かり、感覚もあるのに体は思ったより動かず、魔術も魔法もわかるのにその術式がわからず。

「駄目だなー俺」

がつくりと頂垂れてため息を吐いた。

なんだか最近生きる意味がわからなくなった。なんのために記憶を引き継いだか、なんの生きがいもない人生なんてただの中身の無い瓶だ。

前世の俺の生きがいは悪魔を殺す事、世界を元に戻す事だったか。あと最強を求める事か。なんともまあ実にくだらない理由なこと。

「……ああ、気に入らねえ」

まったく神ってやつはなんだって俺に人生を2度も与えたのか、未だにわからない謎である。

「……………」

ああ、駄目だ。このままじゃナイーブになってしまう。思考を切り替えよう。うん。

「噂、か」

先ほどの言葉。主に割りと本気だったわけだけど俺の批評と共に良くない噂も飛び込んでくる。

それはこの国の いや街の悪い噂。

「少し調べる必要がある、か」

再び城下町に視線を落として俺は頬に手をつける。

「ミレイユ、居るかい？」

「……ここに」

後ろで微かな足音。俺は振り返らずに続ける。

「少し、頼みごとがあるんだ」

## 6話「孤児は困惑する」

タカは孤児で育った捨て子である。

リベルタ王国の教会。その孤児院で育った彼には当時友達と呼べる人は居らずいつも一人で、手に持て余して遊ぶのは一本のダガー。

何を思ったのか赤ん坊にダガーを持たせて捨てた阿呆な親の物である。

それが唯一の親との繋がりであった。

人との接し方がわからずにタカは孤児院の中でダガーを弄り回していた。

神父もそんな彼から親の物を取りあえげるわけにはいかず、かと言ってダガーを弄り回す彼を放って置くわけにはいかず。

そんな彼の前に一人の少年が立った。

アルヴァント・リベルタ・サイクスである。

「ふっ！」

振りぬく剣は弧を描いて回転し、剣先を沈めて下段を振るう。そこから一歩足を後退させて引いて突く。

虚空に突いた剣は空気を裂く音を鳴らしてそこでピタリと止まる。

「ふうー」

息を吐く。筋肉の熱を逃がすようにして体を落ち着かせた。

「おーおー今日もまた懲りずに訓練かい？」

声を掛けられてみればいつもの顔が。

整った顔立ちに清楚な服装。少し薄い蒼が掛かった髪にサファイアの瞳。一見すると美形。だが中身は相当残念。

アルヴィ王子である。

「よう王子。今日もまたミチカゼにアタックか？」

「……君は一体僕をどういう風に見ているんだ」

おや、違ったらしい。

サクヤ・ミチカゼ。1ヶ月前に士官したばかりである兵士だ。スバルの士官学校を卒業したエリートらしい。

だが、本当にその腕前は確かでありこの前の魔物の討伐任務もグランと言つ四足モンスターを3体討伐した。

自分は1体だけでいっぱいであつたために、今日は休日であるのにもかかわらず、ミチカゼの追いぬくために訓練中である。

「……ちなみに彼女なら休日だからいないぞ」

サクヤ・ミチカゼの事で思い出したのか、それとも最初からだつたのか首を忙しく動かして何かを探しているようだからタカは言つてやつた。

「べ、別に僕は彼女の事なんか探してないんだからねっ」

「さいですか」

面倒なのでスルーする事にした。

「それで？なんか用？」

「下町。出ようか」



ニツと笑って彼は夕力を見た。

どつやら、悪友からの誘いらしい。

リベルタ王国の都市であり城下町。アイト＝ハセヌ。この国の混乱から護ったとされる騎士の名前から取った街の名前だ。

城から緩やかな坂が下に伸びてそこから建物が連なっているのがこの都市の特徴である。中央には噴水が置かれてその上には銅像が立っている。街の中央に噴水件銅像を置くことはこの街のシンボルとなる。待ち合わせの場所としても最適でありなにより大軍の進行を妨げる役割を持つ。

そんな噴水の場所で夕力は待ち合わせをしていた。

待ち合わせる相手が女性ならともかく、あの阿呆王子であるのだ

からなんとも残念である。

休日であるためにタカは兵士として城から出ることができたが、アルヴィは違う。一国の王子が城下町へ出て民の観察を行うのもまた不自然ではないが、何分彼は色々有名である。ので、目立ちすぎるのも悪く少々変装すると言つこと。

しかし

「あ、ごめん。待った〜？」

「いや、俺も今きた所だから」

「ねえねえ今日は何処行くー？」

「そうだなー適当に買い物でも行くか」

しかし、しかしながらなんだこの敗北感は。

周りはカップルばかり、それに比べ自分は野郎を待っている。

「……………くわあ！」

無意味な奇声をあげてキッとカップルを睨む。

なんだこいつらは、爆発してしまえ。

「しっかし遅いな。あのアホは何やってるんだ」

待つこと実に30分。人を誘って置いて遅刻とはいい度胸である。

そこへ、肩がトントンと叩かれた。

「ごめん、待たせた？」

「ああん？ テメエ遅刻するにも限度って、もん、が……」

文句の1つでも垂れてやろうと振り返るとそこに美女が立っていた。

少し蒼が掛かったロングヘヤーは背中まで伸びて肩からその髪が溢れ落ちている。薄い緑のカーデイガンに少し清楚で何処か活発的なイメージな白のワンピース。細身でありながら身長は高くタカよりも少し低いくらい。そこにちょこんと小さな手提げバックがあるものだからタカは目を見開いたまま動かなくなった。

「……えっと」

少し言葉を奪われてやっと出てきた声。遅れて言葉を繋いでタカは自分を見つめる彼女に問う。

「……間違いではないでしょうか？」

すると彼女はクスリと笑みを零してそして再度こちらを見つめた。

「間違いではないよ」

……。

タカはいよいよ困り果てた。阿呆王子を待っていたのに、目の前には好みの美女。その彼女が待った？と声を掛けてきた。

えっと……。

何事？

「タカ、僕だよ。アルヴィ」

我慢できなくなったのか、特大の笑みを零してそう彼女は言う。

「え？はあ？えっと、ええ？」

「言つたら？変装が必要だつて」

くるりと一回転。ワンピースのスカートが回って端を2つ小さく  
摘み上げて軽い会釈。

「どう？似合ってるかい？」

「（パクパク）」

「まあ、君の反応を見れば成果があつた事が頷けるよ」

面白そうに言う彼女　ではなくアルヴィ。

「お、お前。変装つて　声が全然違うじゃねーか！それに、その  
なんだ」

「ああ、コレ？」

喉仏に手を当ててアルヴィはそこを触る。「あーあー」と発音練習をした後に「戻った？」と問うてきた。

「……」

唾然。元の阿呆王子の声であった。

「ちよつとした変装魔術さ。喉の声帯を少し弄ることで女性の声も出せるように成れるよ」

「な、なんだそついう事か！ははーん、お前もやるなー！！その姿も変装魔術なんだろう！？」

「え？いや、普通にウィッグ付けて女物の服着ただけど？」

あと少し化粧したかなーと普通に言葉にする。

「……」

なんてこつた。まさか阿呆王子にこんな特技があるなんて……。

少しシヨック。

「まあ、とりあえず」

またもや喉に手を当てて声を変える。

「それではデートと行きましようか？タカ」

## 7話「サクヤの休日」(前書き)

基本的に一週間分貯めて日曜日から毎日予約する方針でいきます。

## 7話「サクヤの休日」

サクヤ・ミチカゼがリベルタ王国に来てから初めての休日は知り合った女兵士達との買い物であった。

誘いは勿論向こうからである。休日は城を出て城下町などへ出てよいということでもリベルタを回ろつかと悩んでいたところを声をかけられたのである。

さて、休日の買い物誘われたサクヤであるが女の子同士の買い物と言うのは必然と身に着けるモノが多い。

洋服であったりアクセサリーであったり。

もちろんそれは兵士といえども変わらないわけで、そしてサクヤよりも年上の兵士が多いわけで。

「あ、これなんて似合わない？」

「えーこれのほうがいいんじゃないかな？」

「あ、私はこっちなー」

当然としてサクヤは着せ替え人形と化していた。

別に悪い気はしない、しかしながら本音としては服ぐらい自分で選ばせて欲しいというのがある。

結局あれこれ着せ替えされた拳句決まったのは計10着。荷物が増える一方である。

リベルタは貿易国であるために東西南北あらゆる地域の品物が市に並び店に売り出される。極東、故国でもある第十四民主資本島日ノ国の品があるのもサクヤにとって嬉しい限りだ。

「あ、あれタカくんじゃない？」

服の買い物が終わり、何処かで食事をしようかと話していた時、一人がそう指して声に出すので見てみれば知った顔がそこにあった。

短い鶏のような髪。軽いTシャツにGパン。首からアクセサリーを身につけて店の前辺りをウロウロ伺っている。恐らくは誰かを待っているのだろう。

「あ、本当だ。タカ坊じゃん。誰か待っているみたいだけど」

「おーい！タカくん！」

タカ。リベルタの兵士の1人である彼とはそれなりに面識はある。親しく話すという分けではないのだがそれでも同じ職場の仲間が偶然会えば声は掛けるだろう。サクヤも彼女達に続く形で彼に話かける。

「タカやない、どうしたん買い物か？」

こちらを見つけた途端、もの凄い形相で「しまった！」という顔をしたのは置いておいてサクヤはそう尋ねた。



なにか後ろめたいものでもあるのか、歯切れが悪く「え、あ、お、おう」と口にする。

「あ、あんた達は買い物か？」

「そうだよー。タカ君が城下町出るの珍しいね、買い物とかそんな興味なさそうなのに」

「え、あ、そ、そうか？結構出るけど」

怪しい。

この会話で感じたのは全員である。この歯切れの悪さ。何か隠している。一瞬でそう感じ取る辺り兵士である。どうしよう、問い詰めようか？アイコンタクトを交わす女兵士達。全員が頷き兵士の1人が声をかけようと口を開いたその時

「ごめんごめん、店員しつこくてさーあれこれ進めてくるあの商業の魂？みたいの少し鬱陶しいよねー。関心するけど」

そんな言葉と共にタカとそれを取り巻く集団に声を掛ける美少女。

サクヤから見てもそれは美少女という言葉にピッタリ当てはまる

と確信できる程に彼女は綺麗であった。

白のワンピースにカーディガン。蒼みが掛かった長髪。その上に帽子を被っている。顔は整っており細身で身長が高い。下手をすればサクヤとは10センチも違うだろう。

「あれ？タカのお知り合いかしら？」

啞然とする女達に首を傾げてその人は尋ねた。

「あ、ああ。俺と同じ職場の人達だよ」

「ああリベルタの兵士さんたちね。初めまして、私はエルワード。孤児だから苗字はないの」

ニッコリと微笑む彼女　エルワードに慌てて呆然としていた兵士たちは自己紹介を始める。当然とサクヤも自己紹介を行った。

そして即座にアイコンタクト。

(え、なにこの女性!?)

(もしかしてタカくんの彼女!?)

(凄い美人じゃない!)

取り敢えず、驚くばかりではなにも進まないの直接聞いてみた。

「えっと、エルワードさんはタカの彼氏かなにかなん？」

「ちょ、おま、そんなわけねーだろ！」

何か焦ったように声を上げるタカ。どうやら『まだ』らしい。

何か女性たちの目が光った気がした。

「ふふふ……そうねー昔馴染ではあるけれど、『まだ』そういう関係ではないわ」

いたずらっぽく微笑み、エルワードはタカを見る。

途端に困ったような、怒ったようなそんな変な顔を浮かべてタカは狼狽した。

「お、お前なー」

「ねえ、貴方たち。買い物途中でしよう？よかったら一緒に一緒にさらない？」

タカの言葉を遮ってそう問ってきた彼女にサクヤ達は困ったような顔をした。

別に良いが、折角の2人の雰囲気壊して良いのだろうか？

「私このリベルタの城下町はあまりきたことがないの。タカに聞いても女物とか詳しくないから買いたいものが中々見つからなくて……」

サクヤ達は顔を見合わせた。

「良い買い物できたわ。ありがとう」

買い物袋をぶら下げたまま笑う彼女にサクヤ達は笑顔でお礼を返した。服を何着かとアクセサリーを何個か買い物をし、どうやら満足行ったようだ。

それにしてもタカも隅に置けない。こんな綺麗な彼女さんが居るのだから。

正確にはまだ特別な関係ではないようだけれども。

「いえ、私達も楽しかったわ」

「ふふ、タカも買い物付き合ってくれてありがとう」

そう微笑みかける彼女にタカは素っ気なく「お、おう」と返すだけ。女兵士の1人がタカの足を踏み、そっと呟く。

(もっと積極的にアプローチかけなきゃ駄目でしょう!?)

タカが困ったような顔をするが、睨む目に仕方なしに口を開いた。

「お、俺も楽しかったぜ」

それだけかいな!

思わず突っ込みかけたがサクヤとしてはまあ他人の恋愛事情に口  
にだすほど経験もないので黙っておいた。

「そう?ならよかったわ!」

本当にうれしそうに微笑むエルワードに全女達が泣いた。

タカが何か言いかけて、その時凄まじい衝撃が彼を襲った。

『!?!?』

彼女たちにとっては突然である。180センチもの巨体であるタ  
カの体が吹き飛んだのである。

兵士としての感覚が一気に蠢いて慌てて大勢を整えてその場から  
離れた。

「おっと、動かない方が賢明だぜ?」

エルワードの口が塞がれ首元にナイフを突き立てられる。男4人  
が彼女を取り囲んでいた。

「エルワードさん!」

サクヤの叫びにエルワードは今自分がどんな状況か理解したようだ。その顔に恐怖が浮かぶ。

思わず舌打ちが出る。

ここは人が多い市でも中央広場でもなくとある路地である。

城下町の南部。エルワードが下宿しているとされる旅館へと向かう近道でもあり人通りが少ない。

兵士として失格である。いくら休日でも自分が士官する国でその都市とは言え、人通りのない場所で『こういう事』が起こらないとは限らないのだ。

ましてや女5人と男1人である。その男であるタカは完全に伸びきっているようで、タカをやれば後はたやすいと判断したのだろうか。

「ちっ、1人かよ……」

どつやら一斉に確保しようとしたらしい。

「まあ、いいや。どつやらとびっきりの当たりくじを引いたらしいからなあ」

首元にナイフを当てている男が不気味に笑った。

「なんだ？捕まえたのは1人か？んだよ、もう少し多いほうがいい

だろう」

「おい、ここは都市だぞ早く引き上げたほうがいいじゃないか？ 1人でも十分『廻せる』だろ？」

次々と現れる男たち。計10人程だろうか。格好すべてバラバラで兵士の格好をしていたり商人の格好をしていたりする。

ただ、唯一の共通点は全員が覆面をしているという事だ。

(盗賊の何かか……？)

こうして変装して入る盗賊も多いと言う。

しかもここは貿易国である。東西南北色々な人種が入るためにこうした輩は決して少なくないという。

しかしながら大胆すぎるだろう。いくら人通りが少ないとはいえ、ここは都市でありその警備も決して薄いわけではない。何か策があるのか、それともただの野蛮な馬鹿どもなのか。

どちらにせよ人質が取られている状態でまともに動けない。

一瞬のアイコンタクト。

(どうする……？)

(相手は私達が一般市民と誤っているんじゃないかしら？)

(なら、一気に近づいてきた所を叩くしかないと思う)

(それがいいわね、サクヤ。エルワードさんをお願い)

(了解)

「おい、どうする？こいつらもいくか？」

その言葉にサクヤ達の心が引き締まる。

(さあ、来るなら来いや……！)

だが、男達が襲いかかることはなかった。

「キヤー！人攫いー！！」

何処から女性の声が聞こえた。叫ぶ悲鳴のような声は男たちを敏感にさせる。

「ま、まずいおい引くぞ！」

「くっ、させるかぁ！」

サクヤ達は急い逃走しようとする男たちに詰め寄った。だが、瞬時に視野が曇り白くなる。

「なっ！？これは……ケホツ、煙幕……！」

しかもただの煙幕ではない。何か細工しているのか、涙腺と喉に強い刺激が襲い咳と涙でまともに前が見れない。

視野が突然と遮られた状態で人間早々体が動くわけではなく、その煙が晴れた時、エルワードと男たちは姿を消していた。





## 8話「盗賊団は笑う」

当初の予定ではあそこに居た全員を捕まえる予定であったが仕方あるまい。人攫いの1人は獰猛な笑みを浮かべて縄で縛り上げた女を見下ろす。目隠しをされて自分の拠点に引きずり込んだ今回の獲物。

暴れるなら意識を奪うつもりであったが案外おとなしい。きっと恐怖で何もできないのだろう。

「おい、きたぞ静かにしろ」

仲間の1人が指を口に当てる。どうやら兵士が巡回に来たらしい。こいつを攫ってからまだ1時間も経ってないのに、素早い対応である。

「少し良いか」

「あ、はいなんでございましょうー！」

外の人の声。その事に少女は顔を上げた。だが、男はその綺麗な首にナイフを当てる。

「おっと……声を上げた途端お前の首が大変な事になるぞ？」

冷たいナイフの感触に少女はまた震え、諦めたように顔を下げた。

「へへっ、兵士殿がこちらに踏み込んでくることを祈りな」

男は下品に笑った。

「この辺りで人攫いが出たという御触れがあった。実際に1人攫われた所を目撃したらしい。して、覆面をかぶった怪しい人物や蒼色の髪の少女を見なかったか？」

「ほお、人攫い！これまた物騒な世ですなあ……。して、申し訳ないのですが、私共はそういった情報は特に……」

「そうか、まあここは酒場だろう。貴殿も積極的に客に声を掛けてみてくれ。情報提供者には金貨10枚。人攫いを捕まえたら金貨100枚を与えると王からの報酬もある」

「分かりました。お勤めご苦労様です！」

そして遠のく足音。いよいよ少女がガタガタと震えだす。

「ふん、リベルタも大した事ないなあ、やはりボンボンの国か」

「おい、そろそろ」

「ああ、お頭に初披露目だ」

少女を連れ出して店の地下へと続く扉を開ける。表向きは小さな

酒場であるがそこは盗賊や人攫いの溜まり場でありアジト。規模的には十数名と少ないがこれまで幾つもの都市で人攫いを行なってきた集団である。

灯台下暗し。

古い言葉にそうある。灯台の光は眩しいがその下元は暗い。人が見落とす場所は手元というわけだ。

人攫いを主な活動とした盗賊【黒き光】。人を 主に女を攫って奴隷商人に売るか自分たちで『廻す』か。

14国でも国際指名手配中の盗賊団だ。

「お頭！今回は廻すための女を連れてきました！」

「ほう、どれ見せてみる」

「ほれ、お頭にご挨拶だ」

目隠しを外し、縄を解く。そしてお頭と呼ばれた男に突き出す。

「ほう、これはまたべっぴんさんを捕まえたなあ」

お頭と呼ばれたのはガタイの良いガツリとした体型の男であった。身長は目視190センチ。半袖半ズボンでありその筋肉は服をはち切れんばかりに盛り上がっている

真上から見下ろされる視線は獰猛な男の目。舐め回すような視線に少女は背筋を凍らせた。

「ほれ、報酬の金だ」

しばらく見た後に後ろに積み重なった金貨の山を掴み取る。そうして手下に渡したのは金貨3枚。その事に男は顔を歪ませた。

「こ、これだけですかい？」

「馬鹿野郎！オメー人に見られたそうじゃねーか。その分差し引いたんだよ」

確かに、人に見られて今は都市中に御触れが出て厳戒態勢を行なっている。幾ら良い品を見つけたとしてもこれからの稼ぎがなくなる。

「まあいい。そろそろ引き際だと思った所よ」

男は再び視線を少女へと向ける。

「どれ、今は楽しむとするか」

その瞬間盗賊たちが興奮の声を上げる。最初はお頭が、その次は手下たちで廻し、ある程度満足できたらもう一度お頭で締める。

商品になるものもある程度遊んでから売るのが彼らのやり方だ。

やはり質は落ちるが楽しめばそれでよい。

そして、いよいよ男が手をかけようとしたその時、笑い声が地下に響いた。

「……何が可笑しい」

少女が、爆笑し始めたのだ。とうとう気でもぶれたか、誰もがそう思った。極度の恐怖状態が続いて精神がおかしくなり、突如笑いだしたり、奇声を発するのを盗賊たちは散々見てきた。実に面倒くさいが、押し倒して犯せばそれまで。奇声が悲鳴に変わりやがて喘ぎ声に変わるのだ。だが、目が据わっていた。

少女は実に透かした目でコチラを見ている。

「君たち、ごめん。残念だけどお相手できないよ……なんてっただで、僕は男だからね」

……。

一瞬の沈黙がすべてを支配する。その言葉を理解するまでに大分時間を要したが、何事もなかったかのように、盗賊たちは少女へと手に掛けた。

「ちょ、ちょっと！僕、男だから！君たち、現実逃避はいけないよ」

「うるせえな、此処に来て俺たちを騙そうたってそうはいかねえよ」

どうやら少女 アルヴィの話を見無視する方針で決まったらしい。窮地に立たされた少女の戯言。そう受け取った盗賊たちは服を脱ぎ始める。

「ええい！これを見てもそう言えるか！」

少女はスカートの中に手を突っ込み、そして勢いよくパンツを脱いだ。

「……」

そこには2つの実が成るヤシの木が鎮座していた。

まったく、最終手段を取らなければならないとは。

俺の立派な逸物を魅せつけて、完全に固まった盗賊たち。別に見せびらかす必要性もないのでいそいそとパンツを履く。ちよつと恥ずかしい。

「男の娘……だと!？」

「ば、馬鹿な!完全に女の子だろ!」

「こんな……こんな可愛い子が女の子の筈がない!」

完全に混乱したようだ。ざわざわと騒ぎ立てる盗賊たちの前に俺

は笑みを浮かべる。

「てめえ……！とんだヘンタイだな……！その歳で女装趣味か、ええ！？」

お頭、と呼べる奴が俺を睨みつける。おお怖い怖い。

「君ほど、性質たちは悪くないよ【黒き光】の頭。ゲルゼイ・サヌー」

俺の言葉に頭の雰囲気が変わった。

「ほう、俺の名を知っているのか」

「勿論、君たちがその国の都市に入り込み、人を攫って遊ぶか、奴隷商人に売る極悪な盗賊だって事もね」

国の都市での治安は決して悪くない。それはどの国でも共通だ。だが、だからこそ【大丈夫】という安心感が出てしまう。都市の真ん中で騒ぎを起こす連中なんて早々いない。そういった常識を逆手に取った悪賢い連中だ。

すでにあの大帝國、ノスカティアですら悪事を働いたというのだから肝が座っているというかなんというか。

「小僧……何者だ……！」

「ん？ああ、自己紹介がまだだったね、僕の名はアルヴァント・リベルタ・サイクス。この国の王子様さ」

瞬間、地下の一室が爆笑の渦が巻き起こった。男たちの下品な笑



い声、腹を抱えて笑う声に俺は嘆息する。その爆笑する理由もなんとなく解るが。

厳格な顔を見せていたあのお頭でさえも笑みが溢れ落ちていた。

「ガハハハ！そうか、そうか、あの有名な王子様であられたか！」

それは間違いなく驕りであった。隠そうともしない圧倒的な余裕名を聞き盗賊たちに余裕の表情が見られる。

「それで？リベルタの王子様はどうするおつもりで？」

「ん？ああ、勿論君たちを逮捕するよ。生憎警察兵でもないんで逮捕状とかはないのだけれども、一応王族だからね、権限くらいは持っているよ。でもまあ、この場合は現行犯逮捕かな？」

「ほほう、帝国でも捕まえきれなかった俺らをリベルタの王子様が捕まえてくださると」

「うん、そうだよ。あ、捕まっても君たちに裁判権とかないから、即刻全員極刑。打首ね」

その言葉にいよいよ盗賊たちは武器を持って俺を囲み始めた。数での圧倒的な差と武器の有無。

誰もが盗賊たちの勝ちを信じて疑わないでしょうね。

「お前に俺たちを逮捕できる力を持っているのか？ええ？阿呆王子様」

「ああー僕は確かに非力で、無能だよ」

実際、今の俺の状況でこいつらを崩せることはほぼ無理だ。いくら技術を持っていても元の体は全く持って使い物にならないのだ。

「だけれども、ね。僕には優秀なメイドが付いているからなんの心配もないよ。ね、ミレイユ」

瞬間、俺の後方から男の悲鳴が響いた。

「……私は便利屋ですか？」

その手に2つの剣を携えて、完璧で最高のメイドがそこに立っていた。

舞う。舞う。舞う。舞う。舞う。舞う。

蝶のように軽やかに、蜂のように尖く。血が飛び、そのメイド服が鮮血で汚されよとも彼女の輝きは決して失われず、逆に舞う血が光を帯びて綺麗に映る。

ただ、そこに悲鳴と飛ぶ首がなければもつと優雅なものだったかもしれないな。

俺の目の前で行われているのは戦いでもなく、ただの虐殺だ。

彼女の2つの剣が動く度に首が飛び、彼女の足が動くたびに1人、また1人と動かなくなっていく。

そこに両者の駆け引きや戦いにおける読み合いや技量の交差などはなく、一合とも交わらずに相手は絶命する。

舞う。舞う、舞う、舞う。

盗賊たちの数はおおよそ30。対してミレイユ1人。俺はただ傍観しているだけなので数には入らない。

圧倒的な数の差。それすらも覆し、凌駕する彼女の技量は達人のそれを超えてすらいるだろう。

双剣特有の斬撃は煌く剣の軌道を微かに残してうごめく。それすらも幻想的に視える彼女の技量に俺は舌を巻いた。

彼女は決して止まらず、軽やかなステップと共に相手を無情にも切り捨てる。相手が背を向けようとも、武器を捨てて投降しようとも、そこに一切の情はなく、一切の油断もない。

「……ミレイユールある程度は残しておいてねー」

見せしめとして、捕らえる予定であるのに、彼女の剣技はすべてを虐殺しかねない。一応注意を呼びかけるが無情の顔は尚も人を切り捨てた。

うーん。か、考えてるのかなー。

俺だつて別に助けようとも思わないし、抵抗してくる奴等を切り捨てるのは構わない。でも、ほら足を切り捨てて動けなくするとか。そんな首を切り離して楽に死なせてあげなくても良いんじゃないかな？

しかし、圧巻である。

気がつけば30あった盗賊は頭を含めて残りは4人程。

決して止まることがなかった彼女が止まり、剣を振って血糊を弾く。そして無表情に4人を見つめた。

「まだ、抵抗しますか？」

これだけ切り捨てておいて無表情にそう問うてくる彼女に恐怖を覚えないほうが可笑的い。

「ひ、ひえー！助けてくださいええ！」

「命だけは！命だけはご勘弁を！」

お頭以外の手下は武器を離してあっさり投降。俺が「君たちには

裁判権はなく即効極刑」と言葉にしたばかりなのに、投降すれば助かると思わせる辺り、彼女の恐ろしさがわかる。

「俺は……俺は、投降なんてしねえぞぉ！」

お頭が吹っ切れたようにして、凶太い剣をミレイユに向けた。

あ、マズイかも。こいつ死ぬわ。

「み、ミレイユ！一応そいつ頭……」

「そうですか、それでは死になさい」

あっさりとお頭の首がとんだ。

まるで最初からなかったかのように、首をなくしたお頭の巨体は立ったまま硬直する。その首元から噴水のように血を吹き出して、よいよ倒れる。

「ひいひいひいひい！」

「神様仏様〜！」

喚く手下を放っておいて、俺は嘆息した。

「ミレイユ？一応僕は止めたのだけれども」

「抵抗したので殺しました」

何か問題でも？

ごく当たり前の事をした、という顔を残したミレイユに俺は何も言えなかった。それだけではなく、彼女の瞳に微かに怒りがあったのを見たのだ。

よく見れば無表情の顔から憤怒の炎が視える。

女性を狙い、攫って陵辱したあげく奴隷として売る。同じ女性としてこいつらに怒りを覚えたのか。

「まあ、いいや。ご苦労様よくやってくれたよ」

鮮血で濡らす彼女の頭に労いの言葉を与えてポンポンと頭に手をやる。

「悪いけど、後片付けもよろしく頼む」

「……仰せのままに」

その次の日。城の前に約30あまりの首が晒された。

黒き光は実に14国の内8あまりの国で人攫いを行なっていたらしい。

解決したのはすべてミレイユの手柄。偶然通り掛かった所を連れ去られてある酒場に向かう所を発見、しばらく監視した後人攫いだと断定。

そして城へ報告した後に単身乗り込みこれを殲滅。捕らわれた少女を救出し、数名の残党を捕らえて後に打ち首。

これが今回の事件のすべてである。書類上は。

「……良かったのですか」

「ん？何がだい？」

「私がすべてを解決した、という形になって」

ペンを回して俺は笑いながらミレイユに答えた。わかってるくせに。

「王族が女装して単身犯罪組織のアジトに乗り込みメイドを使って殲滅させたって？そう報告するのかい？」

「……」

ミレイユは何も答えない。

そう、こんな報告をした日には俺は厄介者呼ばわりだ。

王族がまだ、阿呆が馬鹿やらしたというイタズラ程度の事件ならよかったものの、コレは公式に手配されている国際犯が起こした事件だ。

それを王族が関わり解決したとなると一気に色々な目が俺に向けられるだろう。

実に面倒な事であるし、なにより王族が自らを危険に晒すとなるとリベルタの危機管理が問われる。

「僕は平凡が良いのさ、自由があるね。君が納得できないのなら、今回は僕のプレゼントだと思ってくれていい。いつも迷惑かけているお礼だよ」

ミレイユは今回の件で多くの国から謝礼と自らの階級を上げた。元々メイドとは王族の身の回りの世話をする仕事である。

だが、それを束ねるメイド長は將軍クラスの戦闘技量を持つ者が選ばれる。要は王族直属の護衛騎士と言っている。

国のメイド長はその国の戦力を表すと言われているほどである。



ただでさえ高階級であるのにさらに階級が上がるものだから時給はウハウハであろう。

「さらに君の名前が世界に轟くじゃない？【氷帝の女王妖精<sup>エターニア</sup>】さん？」

「……ご冗談を」

バコ、と彼女の手が俺の頭を叩く。だが、いつものような容赦のない一撃ではなく何処か照れ隠しのような感じであった。

## 8話「盗賊団は笑う」（後書き）

国際手配中の犯人を一国が討伐しとき、被害にあった国は謝礼などを送ると思うんですよ。んで、それが個人であるのか国として送るのかわからないのですが、皆さんどう思いますかね？

私は王直属の騎士に分類されるメイド長であるために国へ謝礼を送ると思うんですが。

てか、国際指名手配されている者を討伐したとして、被害にあった国が謝礼などを送る可能性ってあるんですかね？

## 9 話「転生者の悩み」(前書き)

短めで投稿。転生者の悩みは深く、引きずる。

## 9話「転生者の悩み」

悲鳴、たくさんの悲鳴。体が切り裂かれるような甲高い声と、絶望に歪む人の顔。

怒涛の音が響いて人は逃げるもその【黒】から逃れることができずに飲み込まれていく。

『違う。違う。こんな筈じゃない』

誰かが呟いた。誰だ？

『俺は……やってない……！』

男の呟きは虚しく反響し、そして殺意のこもった目で目の前を見据えた。

『お前だ！お前がやったんだ……！』

周りは地に伏し、そしてその中で1人だけ立つ男。黒い髪に黒い瞳。服装こそ軽い革製のベルトと腰回りのポーチを身に付け、運動に適している履物とラインが入ったシャツ。ただ、その手に持つ剣だけが異様に輝きを放っていた。

『俺は……俺は悪くない……お前が、魔王、お前が……！』

魔王、目の前のが……？

見れど、それは女の人の姿をしている。これが魔王……。

『私を殺す、か？』

一歩、男が進む。やめる……！

『私を、愛してくれたのに？』

更に、歩みは続いて、そして彼女の前に立ち、男は剣を振り上げた。その顔には涙を流しながら。

やめろよ！何やってるんだよ！やめろ！

『……いいよ、お前の、受け止めてあげる』

男が、剣を振り下ろした途端、何かはじけ飛んだ。

目覚めた朝は最悪の朝だった。目覚めたばかりだと言うのに息は荒く、そして背中には汗が吹き出しており、びっしょりと濡れている。

なんだ、今の……？

呼吸が荒いのを整えようとせずに俺は額に手を当てた。

俺の記憶か……！

勇者、ケンジ・サクラギ。前世を記憶を持つ俺はアルヴィとして生まれてこの世に居る。だが、前世の記憶は酷く曖昧でどっちが本当の俺かわからなくなる時がある。

勇者としての俺の存在が曖昧になった時、こうして夢で前世の記憶を感じ取る事がある。まるで、思い出させるように。

だが、どれも曖昧で酷く大雑把に俺が『勇者』である事を認識させるだけであった。断片的なモノを遠くから一斉に見せられるような感じだ。

しかし、先程は凄く、濃い記憶であった。

断片的な記憶の一部をじっくりと見た感覚。そして、俺はその記憶に酷く嫌悪を覚えた。

冗談ではなかった。

アレほどまでに体が自分の記憶を拒絶したのは久しぶりだ。勇者の記憶を思い出した頃程に嫌だった。

息を整えて、俺は膝を立てて座り壁に背を預ける。

さっきの記憶。あれは魔王と戦った時の記憶だろう。俺自身が魔王と口にしていたし、当時パーティを組んでいた仲間の姿も少し見れた。しかも周りの風景。あれは魔王の城の玉座だ。所々壊れていた、ということはある程度戦闘を終えたのだろう。

だが、だがあの悲鳴と歪んだ人々の顔はなんだ？それに、あの魔王の顔はまるで。

トントン。

2回控えめなノック。

「王子、朝食の時間で御座います」

ミレイユの声が響く。

「今日は少し、体調が悪い。朝飯は取らない」

朝食？そんな気分になれるわけがなかった。

「……左様でございますか。では、失礼します」

何か言いかけたか、ワンテンポ遅れてミレイユは口にする。

ミレイユの足が遠ざかっていくのを確認し、俺はため息を吐く。

そして、天井を仰いで再度ため息をぶちまけた。

ケンジ・サクラギの記憶。俺の本当の記憶である筈なのに、そのすべてを思い出せない。そんな、馬鹿な事が俺自身を苛つかさせていた。

前世の記憶を持つなら持つでちゃんと持ってこいよ、なんだって俺はこんなに前生きた記憶についてウダウダと悩まないといけないんだよ。

つか、なんだよ。前世の記憶って。俺はケンジ・サクラギなのか？それともアルヴァント・リベルタ・サイクスなのか？

どっちが本当の俺なんだよ。

マズイマズイと感じながらも俺は延々と記憶について悩むのを抑えきれなかった。

これでは昔の繰り返しだ。いきなり現れた別の記憶。それについて、悩んで、そして荒れて。

割り切ったんじゃないのか？どっちも本当の俺で、どっちも大切な記憶だって。そう決めたたる？俺。

考えたら負けだぞ、俺。そうだ、今までみたいに馬鹿やってそうやって楽しく過ごせば

『私を殺す、か？』



「　　っ！」

『私を、愛してくれたのに？』

「なんだよ……」

『……いいよ、お前の、受け止めてあげる』

「何なんだよ！畜生オ！」

気がつけば、俺は近くの花瓶を投げて壁に叩きつけていた。

「ハア……ハア……」

それで何かが解決するわけではないのに、この行き場のないモノを溜めておくことが嫌で、俺はこうしてモノに当たる。だが、それも一種の気休めで、俺は頂垂れた。

「……王子？」

そこへ、ミレイユが入ってきた。割れる音がしたので、慌てて入ってきたのだろうか、いつもの控えめなノックはなく、微かに見ればトレイが傍らにあった。そしてその音に別のメイドも反応したのだろう、数名がこちらの部屋を後ろから覗いている。

せめて、少しでも朝食を、と持ってきたのだろうメイドに俺は危うく舌打ちしそうになった。

「王子、お怪我は」

「無い、心配するな。下がっていい」

思った以上に自分でもその声色が酷く冷たく、そして鋭いので驚いた。

「しかし、破片などが危険ですが」

「お前、しつこいぞ。【俺】は下がれと言ったんだ」

ミレイユの言葉を切って、そうして俺は睨みつけるようにして彼女を見た。

「　　っ、失礼しました」

一つ礼をして、そのまま下がり扉を閉じる。

複数の足音が下がり、やがて誰も居なくなった事を確認すると、俺は両手を顔に当てた。

「俺は、最低だな」

馬鹿みたいに、一人でまた悩んで、そして心配する従者を睨みつけて当たり散らす。

「はあ」

今はただ大きなため息を吐くしかない。少し頭でも冷やそうと、部屋にあるシャワーを使う事にした。

悲鳴、たくさんの悲鳴。体が切り裂かれるような甲高い声と、絶望に歪む人の顔。

怒涛の音が響いて人は逃げるもその【黒】から逃れることができずに飲み込まれていく。

『違う。違う。こんな筈じゃない』

誰かが呟いた。誰だ？

『俺は……やってない……！』

男の呟きは虚しく反響し、そして殺意のこもった目で目の前を見

据えた。

『お前だ！お前がやったんだ……！』

周りは地に伏し、そしてその中で1人だけ立つ男。黒い髪に黒い瞳。服装こそ軽い革製のベルトと腰回りのポーチを身に付け、運動に適している履物とラインが入ったシャツ。ただ、その手に持つ剣だけが異様に輝きを放っていた。

『俺は……俺は悪くない……お前が、魔王、お前が……！』

魔王、目の前のが……？

見れど、それは女の人の姿をしている。これが魔王……。

『私を殺す、か？』

一步、男が進む。やめる……！

『私を、愛してくれたのに？』

更に、歩みは続いて、そして彼女の前に立ち、男は剣を振り上げた。その顔には涙を流しながら。

やめろよ！何やってるんだよ！やめろ！

『……いいよ、お前の、受け止めてあげる』

男が、剣を振り下ろした途端、何かがはじけ飛んだ。

目覚めた朝は最悪の朝だった。目覚めたばかりだと言っのに息は荒く、そして背中には汗が吹き出しており、びっしょりと濡れている。

なんだ、今の……？

呼吸が荒いのを整えようとせずに俺は額に手を当てた。

俺の記憶か……！

勇者、ケンジ・サクラギ。前世を記憶を持つ俺はアルヴィとして生まれてこの世に居る。だが、前世の記憶は酷く曖昧でどっちが本当の俺かわからなくなる時がある。

勇者としての俺の存在が曖昧になった時、こっぴどく夢で前世の記憶を感じ取る事がある。まるで、思い出させるように。

だが、どれも曖昧で酷く大雑把に俺が『勇者』である事を認識させるだけであった。断片的なモノを遠くから一斉に見せられるような感じだ。

しかし、先程は凄く、濃い記憶であった。

断片的な記憶の一部をじっくりと見た感覚。そして、俺はその記憶に酷く嫌悪を覚えた。

冗談ではなかった。

アレほどまでに体が自分の記憶を拒絶したのは久しぶりだ。勇者の記憶を思い出した頃程に嫌だった。

息を整えて、俺は膝を立てて座り壁に背を預ける。

さっきの記憶。あれは魔王と戦った時の記憶だろう。俺自身が魔王と口にしていたし、当時パーティを組んでいた仲間の姿も少し見れた。しかも周りの風景。あれは魔王の城の玉座だ。所々壊れていた、ということはある程度戦闘を終えたのだろう。

だが、だがあの悲鳴と歪んだ人々の顔はなんだ？それに、あの魔王の顔はまるで。

トントン。

2回控えめなノック。

「王子、朝食の時間で御座います」

ミレイユの声が響く。

「今日は少し、体調が悪い。朝飯は取らない」

朝食？そんな気分になれるわけがなかった。

「……左様でございますか。では、失礼します」

何か言いかけたか、ワントンポ遅れてミレイユは口にする。

ミレイユの足が遠ざかっていくのを確認し、俺はため息を吐く。

そして、天井を仰いで再度ため息をぶちまけた。

ケンジ・サクラギの記憶。俺の本当の記憶である筈なのに、そのすべてを思い出せない。そんな、馬鹿な事が俺自身を苛つかせていた。

前世の記憶を持つなら持つでちゃんと持ってこいよ、なんだって俺はこんなに前生きた記憶についてウダウダと悩まないといけないんだよ。

つーか、なんだよ。前世の記憶って。俺はケンジ・サクラギなのか？それともアルヴァント・リベルタ・サイクスなのか？

どっちが本当の俺なんだよ。

マズイマズイと感じながらも俺は延々と記憶について悩むのを抑えきれなかった。

これでは昔の繰り返しだ。いきなり現れた別の記憶。それについて、悩んで、そして荒れて。

割り切ったんじゃないのか？どっちも本当の俺で、どっちも大切な記憶だって。そう決めただろ？俺。

考えたら負けだぞ、俺。そうだ、今までみたいに馬鹿やってそうやって楽しく過ごせば

『私を殺す、か？』

「っ！」

『私を、愛してくれたのに？』

「なんだよ……」

『……いいよ、お前の、受け止めてあげる』

「何なんだよ！畜生オ！」

気がつけば、俺は近くの花瓶を投げて壁に叩きつけていた。

「ハア……ハア……」

それで何かが解決するわけではないのに、この行き場のないモノを溜めておくことが嫌で、俺はこっぴどくモノに当たる。だが、それも一種の気休めで、俺は項垂れた。

「……王子？」



そこへ、ミレイユが入ってきた。割れる音がしたので、慌てて入ってきたのだろうか、いつもの控えめなノックはなく、微かに見ればトレイが傍らにあった。そしてその音に別のメイドも反応したのだろう、数名がこちらの部屋を後ろから覗いている。

せめて、少しでも朝食を、と持ってきたのだろうメイドに俺は危うく舌打ちしそうになった。

「王子、お怪我は」

「無い、心配するな。下がっていい」

思った以上に自分でもその声色が酷く冷たく、そして鋭いので驚いた。

「しかし、破片などが危険ですが」

「お前、しつこいぞ。【俺】は下がれと言ったんだ」

ミレイユの言葉を切って、そうして俺は睨みつけるようにして彼女を見た。

「っ、失礼しました」

一つ礼をして、そのまま下がり扉を閉じる。

複数の足音が下がり、やがて誰も居なくなった事を確認すると、俺は両手を顔に当てた。

「俺は、最低だな」

馬鹿みたいに、一人でまた悩んで、そして心配する従者を睨みつけて当たり前散らす。

「はあ」

今はただ大きなため息を吐くしかない。少し頭でも冷やそうと、部屋にあるシャワーを使う事にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5092y/>

---

明日は明日の風が吹く（仮）

2011年12月9日01時57分発行